

迷子の遊園地
A C T 1 8

【潮汐の街】

藤田ヒロシ

闇の中に響く声。

トーコ

少女は夢の中

怒りで霞む大地を離れ

悲しみて濁る海原を捨て

〈あの空の向こう？〉

空飛ぶ白いイルカの背に乗って 探している

〈ねえイルカさん 見つかるかしら 見つかるわよね〉

少女は夢の中

それが夢だという確信はないけれど

少女は夢の中で探し物を その正体を探している

「お姉ちゃんの探し物は何?」。いつもそう聞いてきたね。私の探し物か……今聞かれたら、なんて答えるかな? 求めてばかりで、何も探してこなかったね。

ねえ、どんな夢を見ていたの? 探し物はわかったの?

○海。堤防。

静かな波の音。

正立方体の台が四つ、舞台の淵にそって均等に置かれている。

その一つに腰を下ろし、男が釣りをしている。足元にはペーパーバッグ。

男

おっ。

と、竿を持つ手に力を込める。

しばしの沈黙の後、

男

はあ。

と、その手を緩める。魚の引きではなかった。静かに語り出す。

男

君も昔、こうして糸を垂らしたのかな? 女の子だから、こういう

遊びはしなかったのかな？どんな遊びをして育ったのかな？おはじき、あやとり、そういうのかな？

思えば子供の頃の事、この街での事をあまり話してはくれなかったね。僕が聞かなかったのかな。そう言う事かな。どちらにしても、もう知ることは出来な—おつ。

と、竿を持つ手に力を込める。

しばしの沈黙の後、

男
はあ。

と、その手を緩める。魚の引きではなかった。

男
綺麗な海を見て育ったんだね。こんなに綺麗な海なのにね。

そこに大きなカバンを持った派手な格好をした女（ミーヤ）が現れる。男から離れた台に腰かける。

煙草を取り出し、火をつけようとするが付かない。

ミーヤ
あのさあ。

男
（反応しない）

ミーヤ
あのさあ、火持っていない？

男
（反応しない）

舌打ちして、煙草をしまうミーヤ。海を覗き込み、

ミーヤ
あのさあ。

男
（反応しない）

ミーヤ
あのさあ、何してるの？

男
（反応しない）

ミーヤ
オジサン。

男
（ピクリと反応する）

ミーヤ
何してるの？

男
（竿の先を見たまま）釣り。

ミーヤ
（間髪いれず）それは見ればわかる。

チラリとミーヤを見て、一度竿を上げる男。

ミーヤ だからさあ、何してるの？

男 (針を確認して) 餌の確認。

ミーヤ (間髪いれず) それも見ればわかる。

チラリとミーヤを見て、再び竿を構える男。

ミーヤ だからさあー。

男 なんなんですか！？釣りしているんです。集中しているんです。静かにしてもらえませんか？

ミーヤ (舌打ち)

しばしの静寂。

ミーヤ あのさあ。

男 (反応しない)

ミーヤ 此処で魚を釣っても、食べられない。なのに何してるの？

男 (ミーヤをじっと見る)

ミーヤ なによ。

男 そう言う事ですか。

ミーヤ そうよ。

男 (竿の先を見つめる)

ミーヤ まさか、知らなかったってことじゃないよね。

男 ……。

ミーヤ うそお。マジで？それは無いって。アンタ(頭を指して)大丈夫？この街はね「目には見えない毒」に汚れてるの。この海も。こんなに透明で、キラキラしているけど、汚れてるの。目に見える事だけが真実ってわけじゃないの。だから、此処の魚も汚れてるの。

男 知ってますよ。

ミーヤ 最初から言いなさいよ。

男 あなたは、その「毒」を見た事がありますか？

ミーヤ
(首をかしげる)

男
(ミーヤの方を向いて) ありますか？

ミーヤ
聞いていた？ 目には見えないのよ、見た事あるわけないでしょ。

(頭を指して) 大丈夫？

男
(視線を竿に戻す)

ミーヤ
もう汚れているってわけ？

男
いえ。

ミーヤ
余所者(よそもん)か。(後ろを振り返り) この街の中心を示すように建つ煙突。あれが見える場所に住んでいる人は誰もが汚れる。

男
あなたも？

ミーヤ
だろうね。街を出て行ったところで、身ぎれいになるってわけじゃないからね。

男
今は住んではいないんですか？

ミーヤ
まあね。それよりさ、火持っていない？

と、煙草を出す。

男
僕は吸いませんから。

ミーヤ
あつそ。

と、煙草をしまう。

男
止めた方がいいですよ。

ミーヤ
はあ。

男
煙草です。

ミーヤ
「身体に悪い」とか言うわけ？ この街に生まれて、育って、今さらね。健康なんて最初から縁のない話よ。

男
それは違います。例え「見えない毒」に汚れていても、全てが決まってしまっているわけじゃないはずですよ。煙草を止めれば、5年が10年に、10年が20年になる。

ミーヤ
「なる」？

男

……かも知れない。

ミーヤ

例え、伸びたと言っても、それって病院のベッドの上って話でしょ？そんな時間に意味なんてないじゃない。

男

それは違います！

ミーヤ

……。

男

違いますよ。あなたにだって、愛する人がいる。違いますか？

ミーヤ

……。

男

そうでしょ？あなたの命は、あなただけの問題ではない。

しばしの沈黙。

ミーヤ

釣り、初めて？そんなペーパーバッグに道具なんて入れてさ。

男

(バッグを見て) 釣り道具が入っているわけじゃありません。

ミーヤ

なら何？

男

……。

ミーヤ

浮浪者ってそんな感じで荷物を持ち歩くよね。

男

浮浪者ではありません。

ミーヤ

なら何？

男

中身ですか？身分ですか？

ミーヤ

両方。

男

……。

ミーヤ

答えられる方がいいや。

男

無駄な物です。

ミーヤ

はあ？無駄な物をわざわざ持ち歩いているの？

男

無駄ですが、おいそれとは捨てられませんから。

ミーヤ

(大きさに) まさか「毒」？

男

そうですね。そうかも知れません。「目に見える毒」かも知れませんが。そうだと気付く人は少ないかもしれませんが。

ミーヤ 見せてよ。

男 ……。

ミーヤ いいじゃない。どーせ無駄なんですよ？もったいぶらないですよ。

と、男に近寄り、ペーパーバッグに手をかける。

ミーヤ 獲らないわよ。見るだけ。それともー。

と、中身を見て絶句。

ミーヤ (絞り出すように) 何よコレ！な、何が無駄なものよ！！

男 今の僕には、もう意味がないですから。

ミーヤ な、何言っているの？(頭を指して) 大丈夫？

男 「毒」に侵されたかもしれませんね。

ペーパーバッグから手を離し、元の台に腰かけるミーヤ。

しばしの静寂。

ミーヤ あのさあ。

男 (反応しない)

ミーヤ それ、本当にどこかに捨てる気？

男 (ミーヤをじっと見る)

ミーヤ なによ。

男 欲しいですか？

ミーヤ な、何もそう言う事いってんじゃないわよ。

男 そうですか？

ミーヤ 馬鹿にしないで。

男 そうですか。

ミーヤ あのさあ。汚れた魚、そんなもの釣ってどうするの？

男 決めてはいません。

ミーヤ はあ？

男 まだ決めてはいません。

ミーヤ はあ？（頭を指さして）ヤバイね。

男 ……。

ミーヤ ま、精々頑張ってる。

と、去ろうと立ち上がり、歩き出す。

男 （ミーヤの背中に向かって）いいじゃないですか！

と、その声にミーヤが足を止める。

男 魚をどうするか決めないと釣りをしてはいけませんか！目的を決めないと始めてはいけませんか！私は今、釣りがしたい。だから釣りをしている。それだけです。それが精一杯なんです。釣った魚の事は、釣れてから考えたっていいじゃないですか！

しばしの静寂の後、勢い良く振り返り戻ってくるミーヤ。男のすぐ脇に立って、

ミーヤ どーでもいいわ。

男 それじゃ、なんですか？

ミーヤ （写真を一枚出して）この女、見たことない？右側の。

写真を手にする男。

ミーヤ アンタが（頭を指さして）ヤバイのはわかったけど、他にいないからさ。あれよ、あれ「立ってる者は親でも使え」ってやつよ。ま、立ってるのは私だけだね。

男 そこ、笑った方がいいですか？

ミーヤ はあ。

男 （無言で写真に目を落とす）

ミーヤ ちょっと前の写真だから、雰囲気は変わっているけどね。

男 （写真とミーヤを交互に見て）左側は…あなたですか？

ミーヤ はあ？

男 変われば変わるもんですね。

ミーヤ （写真を取り上げて）左はいいの。右よ、右の女！

と、写真を突き出す。じーっと見る男。

ミーヤ 見た事あるの？ないの？

男 (独り言のように) 気に掛ける事ではないと思います。目上と言
うわけでは……あ、歳上ではありませんね……。

ミーヤ はあ？

男 「立ってる者は親でも使え」です。これは親は敬うべき者で用事
を言いつけるなんてもつてのほかだという儒教的な教えが根底に
あることわざで、急用の時は近くのすぐに動ける状態の――。

ミーヤ 見た事あるの？ないの？

男 あっ！急いでいるってことですね。

ミーヤ で、どうなの！

男 ない……というよりも、この街に着いたばかりですから。人には
ほとんど会っていません。

ミーヤ ま、そうか。そりゃそうね。それにしても、物好きにも程がある
ってもんじゃない？わざわざこの街に来て、糸垂らしすなんて馬
鹿じゃないの？あ、馬鹿か、ヤバイんだったね。

男 馬鹿とヤバイは同義語ですか？では、どちらがよりまずい状態を
指すのでしょうか……。あなたは。どう思いますか？

ミーヤ 知るかつ！

と、写真をしまう。

男 その女性、お友達ですか？

ミーヤ 関係ないでしょ。

男 そう言われると、返す言葉がありませんが――。

ミーヤ なら、黙ったら？

しばしの静寂。

再び台に腰を下ろすミーヤ。

ミーヤ 幼馴染よ。この街で一緒に育った。

男 親友ですね。

ミーヤ どうかかな？

男
そうですよ。

ミーヤ
そうなのか。それは困るわね。

男
「困る」ですか？

ミーヤ
困るのよ、親友なんかじゃさ。

男
だから会いに来たのでしょ？

ミーヤ
どうかな？

男
そうですよ。

ミーヤ
そうなのか。それも困るわね。

男
それもですか？

ミーヤ
困るのよ、親友だからじゃさ。

男
そうなんですか。

ミーヤ
そうよ。

男
おっ。

と、竿を持つ手に力を込める。

しばしの沈黙の後、

男
はあ。

と、その手を緩める。魚の引きではなかった。

ミーヤ
釣れないよ。

男
え？

ミーヤ
無理だった。

男
魚いないんですか？

ミーヤ
多分、いる。それもいっぱい。

男
それなら。

ミーヤ
馬鹿？……だったね。

男
餌ですか？合わないんですかね。

ミーヤ
（鼻で笑って）釣り、やったっことないんですよ？

男 ……。

ミーヤ (頭を指して) ココよ、ココ。

男 はい？

ミーヤ 釣りは(頭を指して) ココですよ。

男 (頭を指して) ココですか……。

ミーヤ でもさ、なんでやったことない釣りをしようと思ったわけ？それもこの街でなんてさ。

男 ……。

ミーヤ (何かを決意したように立ち上り) 邪魔しちゃったね。

男 いえ。こちらこそ、お役に立てなくて申し訳ないです。

ミーヤ いいよ、別に。こっちの人選ミスだからさ。

男 選べるほどいませんよ。

ミーヤ (鼻で笑って) 後三時間。

男 え？

ミーヤ 釣った魚をどうするかを考えるなら、あと三時間。それが、長いか短いかはわからないけどさ。精々頑張つて。

と、去る。

首をかしげ、再びじっと竿先を見つめる男。

黒い服の女(トーコ)が現れる。手には紙袋。以下の歌を歌つづる。

トーコ < over the rainbow >

Somewhere over the rainbow

Way up high

There's a land that I heard of

Once in a lullaby

Somewhere over the rainbow

Skies are blue

And the dreams that you dare to dream

Really do come true

(虹の向こうのどこか空高くに 子守歌で聞いた国がある)

(虹の向こうの空は青く 信じた夢はすべて現実のものとなる)

と、男を見つけて、足を止める。

男
おっ。

と、竿を持つ手に力を込める。

しばしの沈黙の後、

男
はあ。

と、その手を緩める。魚の引きではなかった。

トーコ
時間が悪いのよ。

男
えっ？

と、トーコを振り返る。

トーコ
魚にも食欲つてのはあって、餌さえあればかぶり付くわけじゃないって事。満たされてる時や調子の悪い時は例え目の前に御馳走があつても手を出さないでしょ？人間と同じ。ま、四六時中食べてるような例外は人間にも魚にもいるけどさ。

と、男のそばに立つ。

トーコ
ほら、見てみなさいよ。

と、真下の海を覗く。

男、同じように覗く。

すると、男の背中を押すトーコ。

トーコ
わあっ！

男
わあ！！

落ちそうになる。

男
あ、危ないでしょ！何をするんですか！

トーコ
ちよっとやってみたくなくなっちゃって。

男 (無言で竿を構える)

トールコ ほら、見てみなさいよ。

男 (反応しない)

トールコ 二度はやらないでしょ。

と、再び覗く。

トールコ あそこから色が変わってるでしょ？

と、男も再び覗く。

トールコ (声だけで) わあっ！

男 (無反応)

トールコ つまらない男ね。

男 ……。

トールコ あそこから色が変わってるでしょ？大潮の満潮の時は、あそこま
で水面が上がるってことよ。

男 ああ。

トールコ 今はそのずっと下。干潮よ。潮が引き切ってる。魚に食欲はない。

男 えっ？

トールコ やっぱりアンタ、潮目も知らないで釣りしてたわけだ。

男 ……。

トールコ (顔を上げ) 医者？

男 (顔を上げる)

トールコ 弁護士？政治家？評論家？

男 ……。

トールコ 「針と餌があれば魚は釣れる」なんて世間知らずな考えで糸垂ら
す。釣れなければ「此処には魚がない」って自分の無知とは向
き合わない。そんなところかなってさ。どう？

男 違います。ですが、その意見には同意します。

トールコ それって、アンタも嫌な思いをさせられたって事？医者？弁護

士？

男
……。

トーコ
私は医者にね。あ、弁護士にもか。

男
え？

トーコ
（淡々とした口調で）満潮から干潮、干潮から満潮。そうやって潮が動いている時が魚の食欲がある時。特に期待できるのは「上げ三分」「下げ七分」って言って、満ち切るまでの残り三割の時間帯と引き切るまでの残り七割の時間帯。さらに言えば、満潮と干潮の水位差が大きい程期待できる。つまり大潮が最高。で、次の満月は5日後……微妙ね。

男
……詳しいですね。

トーコ
この街で育ったからね。今じゃ誰も釣りも漁もしないから、魚はいっぱいいるはず。潮目さえよくなれば釣れるんじゃないかな。

男
そうですか。

トーコ
飲む？

と、紙袋からビール缶を出す。躊躇する男。

トーコ
付きあつてよ。どーせ暇でしょ？

と、差し出す。受け取る男。

トーコ
（手を差し出し）200でいいや。

男
えっ！

トーコ
此処まで運んできたのに、安いでしょ。

缶を返そうとする男。それを受け取らないトーコ。

トーコ
カネ、持っていないの？

男
いえ。

トーコ
下戸？

男
いえ。

トーコ
何？

男
小銭が……大きいのでいいですか？

と、ペーパーバッグから札束を取りだし、一枚抜き取る。

男
これで。

と、札を差し出す。

男
ツリなんて持ってないよ。

男
いませんよ。

男
この街の人間にはホドコシを持つて事？

男
違います。持っていても、無駄な物なので。

男
知らない。

男
ですから、ホドコシではないんです。哀れみでもない。受け取つて下さい。

男
私が言ったのは200よ。

男
十分じゃないですか。

男
それ200じゃない。

男
はい？

男
200ならもらうけど、それ以外は受け取らない。

男
はい？

男
同じよ。「無駄な物」。だから、求めた以上は知らないわけ。

自分の分のビールを取りだす。そして、それを開け、海の前に向かかって、掲げる。

男
少女は夢の中、怒りで霞む大地を離れ、悲しみで濁る海原を捨てて……。 (軽い口調で) なんて言うんだっけ？

男
はい？

男
 (軽い口調で) 人が死んだ時にさ。あるじゃない。乾杯じゃなくて……。

男
「献杯」ですか？

男
あ、そうそう。それ。

と、改めて掲げて、

トーコ (重い口調で) 献杯。

と、グビグビと飲む。そして、むせる。

男 だ、大丈夫ですか？

トーコ だ、大丈夫。アンタも開けてよ。供養なんだからさ。

男 どなたの？

トーコ 妹よ。もう何年も意識がなくて、眠ったままだった。それでも、手術すれば目覚める可能性があるって信じてきたんだけどね。

男 目覚めなかった。

トーコ (男をじつと見る)

男 失礼。

トーコ 出来なかったのよ。手術費用が私には払えなかった。文字通りに身を削ってカネを稼いだけど、あと少しもう少しってところで、間に合わなかった。

男 ……お悔やみ申し上げます。

トーコ 生きるも、死ぬもカネ次第って事よ。

と、ビールを飲む。むせるのを押えこむ。

男 同じです。

トーコ へ？

男 僕も(ペーパーバッグを手にして)使い道を失ってしまったんです。

トーコ そっか。

男 ええ。

トーコ かさばるだけで、邪魔よね。

男 ええ。

トーコ あんなに求めていたのにね。

男 ええ。

トーコ いっその海にでもまいちやおうか。

男
ええ。

トーコ
「見えない毒」の次は「見える毒」で汚すのよ。

男
（乾いた笑い）はははっ。

トーコ
それともカネで釣りをする？

男
魚ではなく、人間が釣れますね。

トーコ
どっちにしても「食えない」奴ね。

男
（乾いた笑い）はははっ。

トーコ
食べるの？

男
えっ？

トーコ
魚。

男
まだ決めてはいません。

トーコ
何それ？

男
釣れてから決めます。

トーコ
少しは食べる気があるってことだ。

男
……そう言う事になりますかね。

トーコ
なりますね。

トーコ
しばしの静寂。

トーコ
食べれるよ。

男
えっ！

トーコ
アンタ他所者でしょ？一匹や二匹分の毒を取りこんだところで、
なんてことないわよ。仮に今日から此処で暮らして、毎日食べて
も大丈夫よ。

男
「大丈夫」？

トーコ
「見えない毒」で体に異変が起きるまでは時間がかかる。（男をじ
つと見て）ちやうど寿命くらいじゃない？

竿を上げる男。

男
潮はいつ頃？

トーコ 三時間かな。次に竿を出す時は、潮汐表（ちようせきひよう）を確認してくる事ね。

と、行こうとするが、男の声に立ち止まる。

男 妹さん、「見えない毒」に？

トーコ ……。

男 すみません。立ち入った事でしたね。

トーコ そうよ。何でだろうね。同じ街で、同じもの食べて生きてきたのに、私の方が少しだけ早く、長く汚れたのに。なんで、私じゃなかったんだろうね。

男 ……。

トーコ （一気に感情が湧き、問い詰めるように）なんでなの？あの子は、強いよ。簡単に諦めたりしないの。だから、ずっとずっと闇の中でも光を信じて生きようとしてしまった。私なら、簡単に諦めたのに！なんでわたしじゃなかったのよ！

男 ……。

トーコ 誰も答えられないわよね。神様がいるとしたら、その気まぐれって事なんだろうね。たまらないわよね、そんなのってさ。

でもね、あの子で良かったって思う事もあるの。フツーに仕事していたって、生きるのがやつのカネくらいしか稼げないこの街で、手術費用を稼ぐのよ。それがどんな事か、想像つくでしょ？あの子にこんな生き方してほしくなかったからさ。これが最良。全然、そういうことじゃないけど、どちらかがってことなら、これかなって…。そういう意味ではさ、神様って只の気まぐれな奴ってわけでもないのかなって。

しほしの静寂。

男 「見えない毒」は煙突から？

トーコ そう言う事になってはいるけど、そうではないって話もあるわ。

男 えっ？

トーコ （後ろを見て）象徴的だからね。そう聞かされて、誰もが納得しちゃったけど、ホントはどうだか。街だけでなく、海も汚れたんだからね。それでも、今さら関係ないけどね。何処からしろ、

汚れちゃったんだからさ。

男
……。

トーコ
煙突が煙を出し、この街が一番輝いていた頃を「赤の時代」って言うの。なんの工場だったのかは私も知らないけど、会社のイメージカラーって言うの？それが「赤」でね。それで「赤の時代」。煙突にも赤いペンキが塗ってあったらしいけど、もうすっかり剥げ落ちて、だから今を「灰色の時代」って呼ぶ人もいるわ。中途半端よね、灰色ってさ。いつそのこと「黒の時代」なって、全てが闇に消えた方が、楽なのにね。そう思わない？

男
「楽」ですか……。

男をじっとみるトーコ。

男
何か？

トーコ
(首を振る)

再び歩き出すトーコ。

それを男の声が引きとめる。

男
あっ！あなた、右の人？

トーコ
「右の人」？

男
あ、いえ、その……あなた……多分あなただと思うんですが、探していた人がいたんです。写真を見せてもらいました。その人と二人で写っていて……そう右側に。

トーコ
私を探してた？(鼻で笑って)人違いよ。

男
随分前の写真で、言われた通りです。印象は変わっています。だからすぐにはわかりませんでした。でも、あなただと思いません。

トーコ
男？女？

男
女性です。幼馴染と言っていました。

トーコ
「幼馴染」……ね。

男
思い当たる方がいるんですね？

トーコ
そう呼べる人間はそう多くはないけど、みんな此処を出て行ったからね。それに確信はないんですよ？

男 絶対かと問われれば……確かにそうですが。

トーコ 続けるなら、精々頑張つて。

男 え？

トーコ 釣り。

背を向け、去ってゆくトーコ。

それを見送り、しばしの静寂の後、ビールを開ける男。

男 君はこの海を、あの煙突をどんな思いで見っていたのかな？こんな未来なんて想像することなく、無邪気に笑っていたのかな。それなら、嬉しいな。いや、悲しい事なのかな。どうなんだろうね。

と、ビールを海の向こうに掲げ、グビグビと飲む。

竿を再び手にするが、構えることなく持て余す。

そこへ、ミーヤが戻って来る。

ミーヤ どう釣れた？わからないか。

男 あ。

ミーヤ 何？釣れたの？

男 いいえ。

ミーヤ だよね。潮動いてないもんね。

男 「右の人」いました。

ミーヤ (驚き) どこに？

男 此処に。確かに印象は変わっていたので、すぐにはわかりませんでした。しばらく話しているうちになんとなくですが、面影つて言うんですかねー。

ミーヤ で、どっちに行ったの？

男 (指さす)

ミーヤ ありがと。

と、急いで行こうとするが、立ち止まる。

男 どうかしました？

ミーヤ ……。

男 追わないんですか？

ミーヤ ……。

男 探していたんですよね？

ミーヤ ……。

男 会いに来たんでー。

ミーヤ うるさい！！

台に腰を下ろすミーヤ。

ミーヤ (力ない声で) どんな感じだった？

男 「どんな」と聞かれても、初対面ですから。

ミーヤ 元気そうだった。

男 ええ。ただ……。

ミーヤ 「ただ」何？

男 むせてました。ビールを飲んだ後にむせて……。

ミーヤ そう。

男 あれは発病しているって事ではないでしょうか。

ミーヤ そう。(間) アンタがなんでわかるのよ。

男 ……。

ミーヤ 発病した人間を知ってるって事か。

男 ……。

ミーヤ やり場のない憤りと埋めようのない失望。それが此処に足を運ばせたってわけだ。

男 勝手に決めないでください。

ミーヤ (強い口調で) でも外れてはないでしょ？！

男 (強い口調で) それならば、あなたはなぜですか？なぜ捨てた街に戻ってきたんですか？なぜあの人を探すんですか？そして、なぜ躊躇してるんですか？

黙ったままトーコの消えた方に向かおうとするミーヤ。しかし、足を止めて、振り返る。

ミーヤ あと少しの絶望。そこにある希望。

と、ライターを取りだし付けようとするが、トーコの声があるのを止める。

トーコ ミーヤ！？

トーコが紙袋と包みを持って現れる。

トーコ やっぱりミーヤだ。

ミーヤ トーコ。

トーコ 久しぶりね。何年ぶりになるの？5年？

ミーヤ 私が出てって以来だから……6年だね。

トーコ 過ぎてしまえば、早いものね。

ミーヤ でも、十分な時間ね。お互いに、見た目がしっかり。

トーコ 「しっかり」って何？

ミーヤ 「しっかり」はしっかりよ。

トーコ そうね。生きて来たからね。

ミーヤ そうね。

トーコ 私の事、探してたの？なんで？

ミーヤ ……。

トーコ 久しぶりのこの街はどう？相変わらず？それとも更に闇に近づいた？毎日此処にいたら麻痺しちゃうからね。ミーヤの目にはどう映っている？

と、台に腰かける。

ミーヤ 相変わらずよ。灰色のまま。

と、台に腰かける。

トーコ 探すの大変だったでしょ？

ミーヤ 人ごとみたいに言わないですよ。実家はすっかり無くなっているじ

やない。しかも、近所に聞いても誰も「知らない」って言うしき。誰にも引っ越し先を言わなかったからね。でもこうやって再会で来たわけだし、よかった。よかったよね？

ミーヤ
そうね。

と、紙袋からビール出し、ミーヤに渡す。

ミーヤ
ありがとう。

それぞれ缶を開け、

トーコ
再会に！

ミーヤ
相変わらずのこの街に！

と、口をつける。

トーコはむせる。

ミーヤ
(驚いて) ちよ、ちよっと。

トーコ
大丈夫。驚かせて、ごめん。

ミーヤ
トーコ。

トーコ
違うって。

と、ビールを飲む。むせるのを押えこむ。

ミーヤ
この街を出る気はないの？

トーコ
いたいのよ、此処に。

ミーヤ
わからないな。

トーコ
私もわからないよ。でも、いたって思うの、此処に。汚れて、寂れて、家も、友達も、何もかもなくなったけど、それでも思うの。

ミーヤ
しぶとく生き続けるトーコに。

と、缶を掲げる。

トーコ
ミーヤに。

と、缶を重ねる。

それをきっかけに想い出話しの華を咲かせる二人。

荷物を持って去ってゆく男。

トーコ あれはミーヤが騒ぎ過ぎたから止めようと思っただけ。

ミーヤ 別にそんなに騒いでないって。

トーコ 騒いでた。「24色、いっぱいある」ってさ。チャイム鳴ったのに席に着かないから。それで肩を掴んだらさ。床に色鉛筆が散乱しちゃってさ。

ミーヤ ちようど先生が来て、それを踏んで転んじやったんだよね。それ見て、慌てて駆け寄ったトーコが先生のメガネふんづけて壊しちゃってさ。

トーコ 「バキッ」って音で教室の空気が一変してさ。あれはヤバイ！って思った。

ミーヤ 先生は無言で立ち上がって、壊れたメガネ拾って、トーコを見た目が……。

二人 泣いてた！

トーコ 頭の中パニックよ。怒られる。とにかく「ごめんなさい」を言わなきゃって、そこにまさかの涙だからね。

ミーヤ あの頃はメガネが高かったからね。新米教師にとっては、怒るより泣きたくなる出来事だったって事ね。そう言えば、メガネ代は弁償したの？

トーコ した。先生は「いいです。大丈夫です」って言ったけど、うちの親が「どれでは申し訳ない」って引かなくて。

ミーヤ そうだったんだ。

トーコ あれはあれでモンスターね。先生の言う事全く聞かないんだもん、うちの。

ミーヤ 「弁償しなかった」なんて周りから言われるのが嫌だったんじゃない？トーコのところはカネあったから、尚更。

トーコ カネがあった訳じゃなかったよ。見栄張って、私は嫌いだった。「赤の時代」を忘れられないで、何一つ当てもないのに「いつかのあの日」を夢見て。もうとつくにペンキは剥げ落ちていたのに見えない振り……本当に見えていなかったのかもね。

と、ビールを飲む。が、

トーコ もうないや。買ってくるかな。ミーヤもまだ飲むでしょ？

と、立ち上がる。

ミーヤ ……トーコ。

トーコ 何？

ミーヤ 妹は？

トーコ 逝った。

ミーヤ 最後はずっと病院で？

トーコ (首を振る)

ミーヤ 違うの？

トーコ 病院ってさ、カネかかるじゃない。

ミーヤ 出なかったの？保証金とかさ。

トーコ 出たよ。あつという間に消えたけど。

ミーヤ 実家を売ったお金は？

トーコ 借金返済。そもそも、それもあって親は自殺したんだし。生命保も入れて、どうにか完済できたけどね。

ミーヤ 全然残らなかったの？

トーコ 少しわね。

ミーヤ ならー。

トーコ もう子供じゃないって思っていたけど、自分たちだけで自分たちを守る程じゃなかった。大人が発する耳触りのいい言葉なんて信じるもんじゃないね。

取り返そうとも思ったわ。でも出来なかった。騙し取られて、生きてゆくのがやつとなのに、それにもカネがかかるんだよね。正義も悪もない。結局はあるのはカネの力。

ミーヤ それじゃトーコが看てたの？

トーコ 最後の2年はずっと眠ったままだった。恨みも願いも口にするとなく、ずっと夢の中。

ミーヤ ……。

トーコ 私で稼げるカネで入院させられる事が出来なかったわけじゃないのよ。

ミーヤ ならー。

トーコ 出来たのは入院だけ。ただベッドに寝かせて、死ぬその時をただ待たせるだけ。未来を用意してあげる事は出来ない。

ミーヤ 「未来」？

トーコ

妹を輪切りにした写真を何枚も見せられて、聞いたことない単語を呪文のように聞かされて……意味はわからない。でも伝わる。「絶望的」。この街で生まれ生きてきた。噂も散々聞いてきた。「運命」って片づけて、受け入れる下地が無意識のうちに出来ていたんだって気付かされた。「わかりました」って口にするのは、驚くほど簡単だったよ。だけどさ、話はそれで終わらなかったのよ。「方法があります」。人間、心から驚くと何も反応できないって言うけど、本当ね。頭の中で三回繰り返し返してようやく理解出来できて、気付いた時は「お願いします。妹を助けてください」って、何度も、何度も頭を下げていた。目の前に立っていたのは白衣を着た天使？神？同じ人間とは思えない存在。まるで拝んでいるように、頭を下げ続けた。

そして、そこに言葉が降ってきた。「ですが大変高額な費用がかかります」

昔ならなかった話。「運命」と受け入れるしか道はなかった。でも今は違う。時間の経過が、医学の進歩が生と死の境を変えた。でも、それが「幸運」とは限らない。藁さえ掴もうとする状況で、それより確かなものがある。けれど、手の届くところにそれはない。身が張り裂けそうに伸ばしてみても指先が触れることさえできない。心が張り裂けそうに悲鳴を上げても、それを声に変えることさえできない。受け入れる下地なんてあるはずもない。絶望。

天使も神でもなく、所詮ただの人間。同じ人間。「こっち」と「あっち」の違いだけ。

妹には眠りから覚めて、起き上がって、この街から出て、「あっち」へと行って欲しいと思っていた。煙突のない街。色のある街。その為なら私はどうなってもいい。後ろ指差されようが、冷たい視線浴びようが、地べた這いずり回って、男の欲望飲み込んで……とにかくカネを稼ぐ。時に甘えて、時に責めて、メイドにだって、女王にだって、仰せのままにやってきた。私なんて存在はもうと

つくに消えていて、だから辛くもなんともなかった。それなのに、あと少しもう少しだったのよ！ずっと助ける為に生きてきた。その事だけが、私をいつもギリギリのところまで動かしていた。あと少しもう少しだったのよ！もう永遠に届かない。もう届かないの！一体この先に何があるって言うのよ！

と、海の方こうを眺め、泣きだしそうになるが、涙が流れる前に、むせる。

ミーヤ

トーコ、アンタ、やっぱりー。

トーコ

大丈夫よ。大丈夫。無理なんてしてないって。ちゃんと食べてるし、ちゃんと寝てる。妹に心配されるほど落ちちやいませんよ。

立ち上がった、

トーコ

あと少しだから、待っててね。ほら、目標まで、もう少し。今年のクリスマスには間に合うよ！久しぶりにツリー飾ってお祝いしようね。ケーキも手作りしちゃおうか？え？そうね、すぐには無理ね。でもさ、ツリーだけでも飾ろうね。あと少し、もう少しだからね。

と、倒れる。

ミーヤ

トーコ！トーコ！トーコ！！

と、トーコの頬を何度か軽く叩く。反応の無いトーコ。

ミーヤ

(小さな声で) トーコ。

小さく震えだすミーヤ。やがてそれは大きくなり、いつしか笑い声を上げる。

ミーヤ

ハハハッ！やっぱりアンタ発病してるんじゃない！「あと少し」それって、妹を助けるカネが貯まるまで？アンタの寿命？それとも、その両方って事だったの？

(海の方こうを見て) 最高の姉ね。命削ってまで助けようとしてくれたなんて！

と、まだ残っていた自分のビールを飲み。

ミーヤ

かー。(興奮して) 最高、最高の味よ！

と、ビールを置き、

ミーヤ

保証金バブルかと思ってたけど……その命を削って貯め込んでるってわけね。ねえ、家は何処？カネは何処？

と、トーコの頬を数叩く。

ミーヤ

さあ、教えて、答えて。

すると、トーコがミーヤにすがりつく。

トーコ

大丈夫よ。大丈夫。

ミーヤ

(甘ったるい声で)全然ダメじゃない。わかっている？私はミーヤよ。妹じゃないよ。

トーコ

大丈夫よ。大丈夫。

と、足を伝って来る。振り払うミーヤ。台に座りこむトーコ。

ミーヤ

確かに時間の経過が、医学の進歩が生と死の境を変えた。カネがあれば助けられる命も、買える命もある。でもね、無理よ。一度「こっち」落ちた人間は一生這いあがれないのよ。例えカネがあっても「あっち」には行けないの。アンタに説明した医者だってその事は知ってる。知った上で、一応、義務で口にしただけよ。それを真に受けてどうするのよ！アンタや私の様な「こっち」の人間が、そんな上っ面の言葉に希望なんてものを見出して、どうするのよ！初めから決まっていた結末。運命ってやつよ。ねえ、聞こえてる？

トーコ

大丈夫よ。大丈夫。無理なんてしてないって。

ミーヤ

アンタ、もう脳までやられてるわけ？

と、トーコの頬を数叩く。

ミーヤ

あの日、アンタは36色の色鉛筆を机の上に広げた。クラスで誰も持っていなかったから、みんな口々に言ったわ。「いいな」「羨ましい」「ってね。輪の中心で微笑むアンタは、私の机の上の12色の色鉛筆を見て言ったのよ。「よかったら、コレもらって」って。それはまだろくに使っていない24色の色鉛筆。みんな口々に言ったわ。「いいな」「羨ましい」ってね。同じ言葉を掛けられたのに、私はアンタみたいに微笑む事は出来なかった。ねえ、私そんなに物欲しいような顔でアンタを見ていたのかな？ねえ、どうなのよ！

昔のアンタは「あっち」の人間気取りだったのよ。いい？善意の

行為だからって何してもいいってわけじゃないのよ。アンタの悪意の無い無邪気さが、昔から気に食わなかったのよ！！

と、トーコの顔に近づいて、

ミーヤ

でもね、思ったのよ。そんなに与える人でいたいなら、そうさせてあげようってさ。私が与えられる人でいてあげようってさ。私たち親友なものね。想いを無駄にしちゃ可哀そう。そうでしょ？

と、ビールを口に含み、それを吹きかける。

ミーヤ

さあ、教えて、教えて。

トーコが顔を上げ、ミーヤを強い視線で見上げる。

ミーヤ

何よ、その目は？無駄よ、そんな目にはとっくに慣れて、麻痺してるわ。

カネがあれば、息子が……私、息子がいるのよ。三歳になるの。驚いた？でもさ、子供がいるなんて「普通」のことよ。そういう歳になったんだよ。

でね、その息子が「あっち」に行けるかも知れないの。ううん、行けなくても「こっち」で少しはまともに生きていける。「あっち」の人間取りで生きていけるのよ。助け合い、分かち合い、思い遣り、自由に平等……声に出せる言葉に真実なんてものはない。わかるよね？どっちにいたって、何処にいたって、上か下かで全てが決まるの。

街の外に出れば、煙突のない街に行けば、まだ望みはあると這い出した。信じていたのよ。世界はそんなに嘆く事ばかりじゃないって。信じ続ければ、努力し続ければ、必ず返ってくるってさ。でもさ、やっぱりさ、世界は嘆きで満たされていたのよ。(首を振って)煙突よ。煙突。何処に行っても、目には見えなくても煙突が建っていて、いつだって私を見下し、汚し続けるの。この街に生まれた。ただそれだけ。だけど、それは決して変えられない。もがけばもがくほど、彷徨い、弾かれ、堕ちて行くだけ。

闇の中で見る上っ面の優しさは、何よりも美しく心を奪う。手を伸ばし、抱かれ、溺れて、また更なる闇へと堕ちて行く。

妊娠は望んでいたわけじゃない。正直、戸惑いはあった。それでも、嬉しいって思いもちゃんとあつて、だから生むと決めた。「普通」そう、この街で一番手に入らない「普通」の幸せがようやく

って手に入るってさ。

トーコ
大丈夫よ、大丈夫。

と、ふらつきながらも立ち上がり、ミーヤに手をかける。

トーコ
大丈夫よ、大丈夫。ミーヤ……。

ミーヤ
（その姿に怯えながら、言葉をぶつける）アンタだって同じでしょ？「君では無理だ」そう決めつけている目が悔しくて、悔しくて……。「お金ないんだ、ごめんね」って詫びるのが悔しくて。条件反射で「お願いします」と拝んだ自分が悔しかった。そうでしょ！「助けたい」。確かにそれもある。でも、悔しさを晴らしたい。そうでしょ。姉としての見栄。母親としての見栄。

トーコ
クダラナイ……そう、もう全て、何もかも、アンタも私も、クダラナイ！でもどうしようもないじゃない！止められないじゃない！こんな私でもあの子の事は愛しているのよ！心の底から愛しているのよ！何をしても守りたいのよ！こんなだけど、私は母親なのよ！！

トーコ
大丈夫よ、大丈夫。

ミーヤから離れ、フラフラしながら包みを手にし、それを開ける。瓶に入った札束。

ミーヤ
（驚きと興奮で笑って）なんで？なんで、此処にあるのよ。

と、瓶を開け、札を取り出す。

ミーヤ
貯め込んだわね。随分と売れたじゃない。何人分かしたら？

トーコ
（それまでよりはつきりした口調で）大丈夫よ、大丈夫。ミーヤ。

ミーヤ
な、なによ。

トーコ
そんな憎まれ口なんていらぬよ。そんな虚勢もいらぬよ。たった一言、あの時みたい「ちようだい」って言ってくれればいいのよ。

ミーヤ
はあ。

トーコ
36色の色鉛筆を買ってもらって私は困っていたの。だって、24色のそれだって上手く使えていなかったのに36色だなんて。何を描けばいいの？何も描く物などないのに。色鉛筆ばかり増えても、心に色は増えはしない。ただただ滅茶苦茶に色が混ざり合

って、灰色に染まってゆく。だから、嬉しかった。ミーヤが「それなら24色を私にちょうだい」って言ってくれた時、嬉しかったの。

ミーヤ (首を振り) 言っていないわ、そんな事。

トーコ 言ってくれたわ。ミーヤは私から無駄な色を取り除いてくれた。今度も私から無駄な物を取り除いてくれる。親友ね。だから、大丈夫よ、大丈夫。たった一言、あの時みたいに「ちょうだい」って言ってくれば、カネなんてあげるわ。

ミーヤ ……何それ。

トーコ もう妹は逝ってしまった。だから私には無駄なものよ。使いようがないのよ。

ミーヤ 自分の治療は？いるんじゃないのカネ。いるでしょ、カネが！

トーコ (首を振る)あと少しで絶望。そこにある希望。それは叶わなかった。だから、もう絶望だけが私を待っている。もう憎まれ口なんていらぬ。虚勢もいらぬ。

ミーヤ ……。

トーコ あの時と同じよ。

二人の中に蘇る「あの日」

○あの日の教室(回想)

チャイムの音。

横並びの台に腰かけるトーコとミーヤ。

ミーヤ 色鉛筆持ってきた？

トーコ う、うん。

ミーヤ トーコの色鉛筆は色がたくさんあって羨ましい。

トーコ そう？

ミーヤ そうだよ。

と、覗きこむ。

ミーヤ あれ？新しい！色が増えてる！？ええ！！いち、にい、さん……
何色あるの？

トーコ 36色。

ミーヤ 「36」スゴイ！ちよつと、見せて！

と、覗きこむ。

色鉛筆を手に取り、驚きの声を上げるミーヤ。それをそっと見ているトーコ。

ミーヤ これ、ちよつと貸して。

トーコ いいよ。

一本手に取り、自分のノートに試し書きをするミーヤ。

ミーヤ すごい。すごいよ、トーコ。

トーコ うん。

ミーヤ 次は……コレ。

と、色鉛筆を持ち替え、試し書き。

ミーヤ すごい。これも、すごいよ、トーコ。

トーコ うん。

ミーヤ 次は……コレ。

と、色鉛筆を持ち替え、試し書き。

ミーヤ すごい。これも、すごいよ、トーコ。

トーコ うん。

ミーヤ 次は……コレ。

と、色鉛筆を持ち替え、試し書き。

ミーヤ すごい。これも、すごいよ、トーコ。

トーコ うん。

ミーヤ 赤って言っても一つじゃない。薄紅色、紅色、紅樺色、朱色……
色って、こんなにもたくさんあるんだね。

トーコ うん。

ミーヤ いいな、トーコは。これだけ色があれば何でも描けるね。
トーコ う、うん。

ミーヤ (独り言のように) 私なんて12色。単調な世界しか描けない。
トーコ ん？

ミーヤ ねえ、トーコ。24色の色鉛筆はどうしたの？捨てちゃった？
トーコ 持っているよ。まだ使えるに、母さんが買って来ちゃったんだ。

ミーヤ もう使わないよね？だって36色があるんだもん。

トーコ う、うん。

ミーヤ よかったら、24色の色鉛筆ちょうだい。

トーコ えっ。

ミーヤ ね、いいでしょ？トーコ。

トーコ ホントに？もらってくれるの？

ミーヤ うん。

トーコ ありがとう。

ミーヤ それは、私が言う事でしょ。

トーコ ううん。ありがとう。

と、机の中から取り出した24色の色鉛筆を差し出す。

ミーヤ (それを受け取り) こちらこそ、ありがとう。

笑い合う二人。

ミーヤ やった！もらっちゃた！24色、もらっちゃた！

と、立ち上がり喜ぶ。

○海。堤防。

静かな波の音。

再び男が現れ、台に腰かける。海を覗きこむ男。そして、竿を出す。

トーコ もらってくれるの？ありがとう。

小さく震えだすミーヤ。やがて、

ミーヤ ふざけないで！何が「ありがとう」なわけ！それが気に食わないって言ってるのよ！！馬鹿にしないで！ふざけないで！！なにが……なにが……「ありがとう」なわけ！私はね、アンタが身体を売ってまでして貯め込んだカネを奪って行くのよ！それが、なんで？なんで礼なんて言われなきやいけないのよ！わけわかんない。なに、これ？なんなの？なんなのよ！！ふざけないでよ、馬鹿にしないでよ、私は……私はさ……何なのよ、トーコ！アンタは一体なんなのよ！私は一体何なのよ！！

トーコ 親友だよ。

ピタリと動きを止めて、しばしの静寂の後、笑いだす。始めは小さく、そして次第に大きく。

ミーヤ 何が「親友」よ。笑わせないでよ。親友なんかじゃ困るのよ。憎んでよ！恨んでよ！蔑んでよ！

トーコ (首を振る)

ミーヤ 何ですよ！何なのよ！私から逃げ場を奪わないでよ！

トーコ 親友。それだけで超えられるじゃない。憎しみも、妬みも、裏切りも。だからさ、親友だよ。

しばしの静寂。

男 おっ。

と、竿を持つ手に力を込める。すると、強い引きがある。竿を握りながらバタバタと慌て、やがて糸が切れて尻餅をつく。

呆然と海を眺める男。

男 君もこうして、突然の終わりに戸惑ったのかな？割り切れない想いに支配されたのかな？

思えばあれから、あまり話をしてくれなかったね。僕が聞かなかった。そう言う事かな？どちらにしろ、僕は君と君の病に向き合っただけじゃなかったんだね。

ずっと一緒、隣りにさえいれば通じていると思っていた。そんな僕を君は責めなかった。でも、きっと、寂しい思いをしていたん

だろうね。一番近くに、一番一緒にいたのにね。僕は君の灰色に
気付く事さえ出来なかったんだね。

ペーパーバッグから札束を取り出す男。そして、それをそっと
海にまく。

ミーヤ
！

（ミーヤに）なぜ素直に言わなかったんですか？なぜ「欲しい」
と言わなかったんですか？そうすれば、簡単にあなたのものにな
ったんですよ。只の紙切れじゃないですか？何をそんなに構える
必要があるんですか？何をそんなに堅くなる必要があるんです
か？只のカネじゃないですか？

ミーヤ
馬鹿じゃないの？！ヤバイんじゃないの！

男
何度もそう言われましたね。でも、正気ですよ。

ミーヤ
アンタまで！なんなのよ！

男
声を荒げる位なら、さあ、拾って下さい。

と、ペーパーバッグから更に札束を取り出し、それを辺り一面
にばら撒く。

男
（乱れた呼吸を整えることなく）欲している。求めて来た。何よ
りも大切だと信じてきた。そうでしょ？なぜ遠慮しているんです
か？なぜ我慢しているんですか？なぜ躊躇しているんですか？そ
んなあなたで生きて行けるんですか？この「毒」に汚れた世界で
まだ生きて行くんでしょう？あなたはまだ、愛する者の為に生きて
行くんでしょう！さあ、拾って下さい。

そして、最後のひと束をミーヤに押し付けるように渡す。

ミーヤ
（涙声で、荒げて）馬鹿にしないで！生きて行くわよ！無様に這
いずり回ってさ。あと少しの絶望、そこにある希望。鼻で笑い飛
ばし、それでもすがってさ。生きて行くに決まってるじゃない！
馬鹿にすんじゃないわよ！！

札束を命一杯の力で掴むミーヤ。そして、散乱した札をかき集
める。

それを見て、竿を拾い去ろうとする男。

トーコ
止めるの？

男

はい。

トーコ

潮は動き出した。これからよ。

男

（竿を掲げて）切れました。替えはありません。

と、軽く頭を下げて去ってゆく。それを見送るトーコ。

かき集めた札を一枚一枚伸ばしては束ねて行くミーヤ。

トーコ

少女は夢の中

怒りで霞む大地を離れ

悲しみで濁る海原を捨て

〈あの海の向こう？〉

空飛ぶ白いイルカの背に乗って 探している

〈ねえイルカさん 見つかるかしら 見つかるわよね〉

少女は夢の中

それが夢だという確信はないけれど

少女は夢の中で探し物を その正体を探している

「お姉ちゃんの探し物は何?」。いつもそう聞いてきたね。私の探し物か……今聞かれたら、なんて答えるかな? 求めてばかりで、何も探してこなかったね。

と、瓶をミーヤの目の前に置く。

すると、その瓶に集めた札を詰め込むミーヤ。瓶を抱き締める。

トーコ

ねえ、どんな夢を見られるの? 探すべき物などあるの?

ねえ、教えて、答えて。

波の音が響き続ける。

F I N

無断使用・転用禁止

上演記録

2014年12月7日(日) 木下恵介記念館

●キャスト

トーコ 北澤さおり

ミーヤ 白柳友紀

男 小粥幸弘

●スタッフ

作・演出 藤田ヒロシ

照明 藤田ヒロシ

音響 土谷侑子

制作 れいこ・岡田未夢